

湖北省の古塔

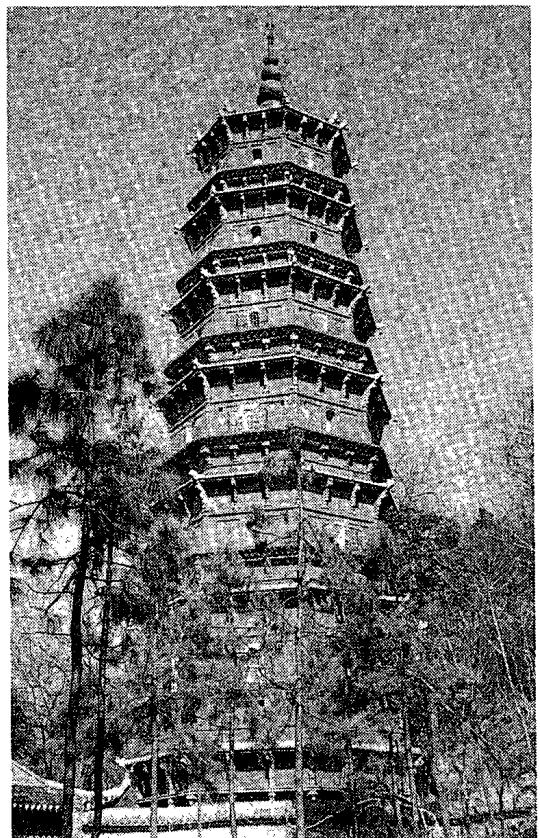
岡 島 秀 隆

一、洪山宝塔

この塔は、武汉市珞洪区の「宝通禪寺」内にある。武汉市の中心には長江が流れ、その西岸は漢水によって南北に隔てられている。その北岸は漢口、南岸は漢陽である。長江の東側は武昌と呼ばれる。長江に架かる「武汉長江大桥」を渡つて主要道を東進し、名高い「黄鶴楼」を過ぎると洪山がある。近辺には武昌駅があり、北方に東湖・沙湖、南に南湖があり、変化に富んだ景観と市井の喧噪とが独特の雰囲気を醸し出している。洪山は小高い丘陵だが、洪山公園となつており、緑豊かな場所である。この山上にあるので俗に「洪山宝塔」と称されるのである。元来は「靈濟

塔」と称し、元の大徳十一年（一二三〇七）始建で延祐二年（一三一五）に完成をみたとされる。塔の外壁は赤茶色に彩色され、斗拱組だけが灰白色に映えている。塔形は八角七層の樓閣式塔である。築材は磚（煉瓦）と石材を併用しており、塔身内部に石を積み上げ、その外側を磚で包み込んでいるというが、何とも新しい感じで上層の門には鉄製の柵が設けられているから近年改築されたのかもしれない。各層毎に石造（？）の外檐斗拱と腰組斗拱を組み上げているが、台輪横材上の斗と軒桁下の肘木の間に別の斗拱を組まず、飾り彫刻を施した縱材一本を用いる特徴的な造作をしている。また各層塔身下の腰檐には二列の「菱角牙子」が並ぶ。隅行にそれぞれ風鈴が下がる。塔刹は露盤と受け

湖北省の古塔（岡島）



洪山宝塔

花の上に三連珠形の宝瓶が上げられ、先端に何かの造形があるがよく判らない。塔内には階梯が旋回して階上へと連なっているという。上層からは武漢市区の風景が観覽できる。塔高約四十三メートルといわれている。直下の南壁面に「華嚴洞」と刻されたアーチ形の洞門があるが見るべきものはない。周辺にはクス等の雑木が繁茂しており、麓の山門辺りからでは塔身の半ばほどしか確認できない。



天然塔

二、天然塔

宜昌市の市街東方約七キロにある。晋代の郭璞（二七六—三二四）の建立と伝えられ、清の乾隆五十七年（一七九二）に改修されているという。八角七層の磚石塔で、塔高約四十二メートルある。八角基壇の底隅には八大金剛の石彫が嵌め込まれている。塔身第一層は西にアーチ形の門が開かれている。西側に流れる河が長江である。川辺は荷物の積み下ろし場のようになつていて、門の上部に「天然

塔」の名が刻まれた黒色扁額を掲げ、左右には対聯を擁している。内部に入ると東に丸窓がある。その右手の螺旋階段で上層に登ることができる。二層目以上では四方にアーチ形の門が開いている（一、三、五層では東西南北、四、六層では一面ずれる。七層は門がない）。階を登ると右へ右へと登上門があり、最上第七層まで登れ、宜昌港を見下ろすことができる。各層の檐下には三ッ斗斜栱が横一列に並んでいる。塔刹は一連の宝珠様が見え括れた部分に大径の環がある。保存状態は良いようだが、塔の壮大な割に造建の由来等が明白でない。

三、万寿宝塔

この塔は沙市市の南、荊江大堤の上に建っている。省の重点文物保護単位の一つに数えられ、周囲は庭園として整備されている。「万寿園」の額が掲げられた入口を通り抜け、小路を進むとこの塔が建っている。別名「接引塔」という。塔の南方木立の間に碑があり、「觀音磯頭」と朱書きされている。裏面は碑文がある。かつて側に「觀音寺」があつたことからこの地を「觀音磯」といったようである。

湖北省の古塔（岡島）

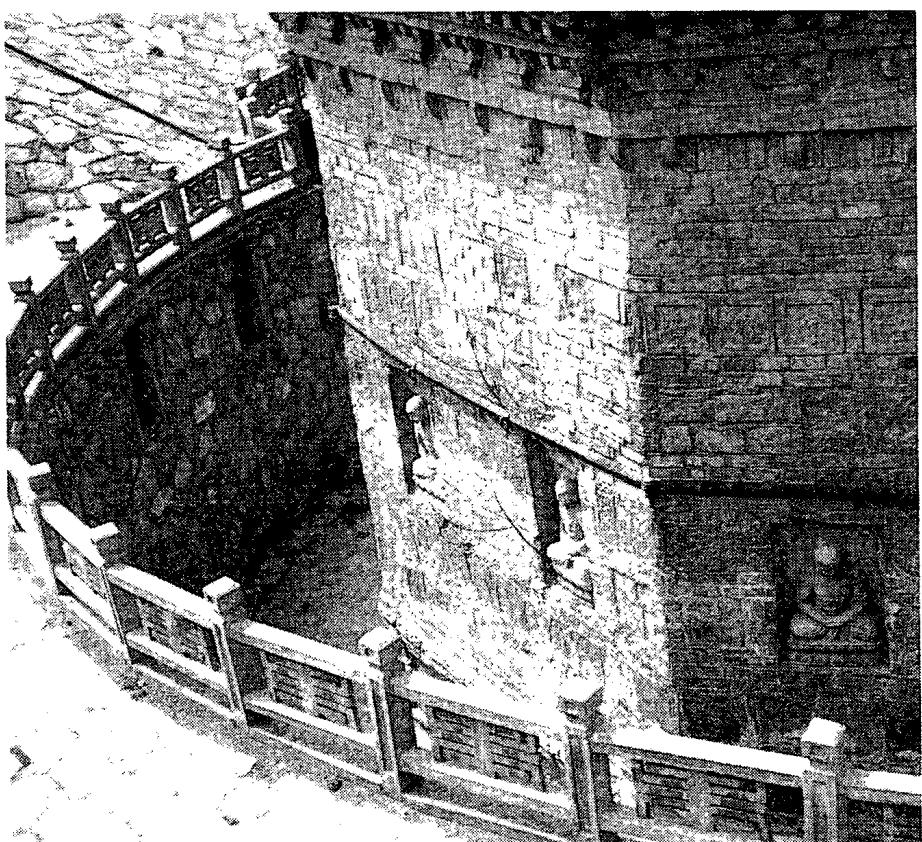


万寿宝塔

またの名を「象鼻磯」（象の鼻のように川辺に突出した地であるからか）、俗には「宝塔磯」ともいうようである。南には満々と水を湛えた長江が東方に流れ去る。この地は『三国志演義』「孔明三氣周公瑾」の話で名高い「蘆花蕩」に接している。この辺りは流れが随分急に見えるが渡し場が多い。また、沙市は「長江十大港口」の一に数えられると言うが、西に溯れば宜昌・重慶、東に下れば漢口・上海に至る航路が開かれている。長江をゆく船から眺めればこの塔はまさに沙市のシンボルと言えよう。こうした点を考

湖北省の古塔（岡島）

えると、この塔は明朝第七代遼王朱獻燁が毛太妃の命をうけ嘉靖皇帝の祈寿のために明の嘉靖二十七年（一五四八）に建立に着手、三十一年に完成されたというが、鎮水や航行安全を願う意味も込められているのかもしれない。塔形は八角七層で樓閣式磚石塔である。高さは約四十・七六メートルある。実は遠方から見ると六層のように見えるのが、最底層は地平面下にある。南側正面に進むと石段が下方に伸びており、塔身周囲に堀が巡っている。塔正面の向側には「龍泉」と記された洞があり、上方に三つの龍首が並んでいる。塔の基層は上部各層より長大で石造となつていて、台座の八角には小さな力士（兵士？）像が腰を下ろして塔を支えている。南面にアーチ形の大門が開き中に入れる。その上方に仏龕が並んでいるが、各面二座ずつ計十六の龕に座仏が安置されている。正面だけは正門真上に一つの小門、その上に「万寿宝塔」の扁額を飾る。軒下には三ツ斗斗栱が各面七つずつ組まれ、さらに二軒の垂木が見られる。二層以上は磚造である。塔身全体の感じは上層と下層の幅がかなり違うのでどっしりと安定している。各層に塔檐が積み出され、二軒の垂木（六、七層は一軒）も見



基層細部(万寿宝塔)

える。その下には木造建築様式を模して斗栱が磚によつて造成されている（斗栱の数は上に行くにつれて各面一つず

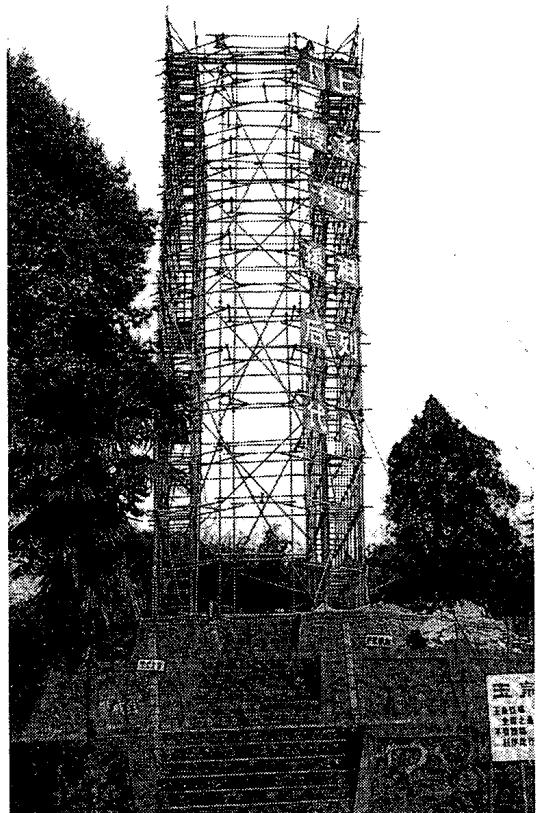
つ減少し第六、七層で各面二つとなる）。さらに、各層外壁には各面一、二個の仏龕が設けられており、その数は基層と合わせた総数で八十七個にも及ぶという。それぞれの龕には白玉石刻仏像が収められている。その他にも塔の内外の壁には磚雕のさまざまな形姿の仏像石板が嵌め込まれている。銅製の塔刹宝珠は鍍金がほどこされ、『金剛經』の全文が刻まれているという。経を刻したこの種の塔刹は甚だ珍しいといふ。多層塔は奇数層のものが一般的であるが、上部と異なつた構造が見出される地下基層を除外すると、六層塔の外見はあまり多くは散見できないようと思われる。塔上の装飾煉瓦（花磚）は全て当時の各州、府、県の献じたものといわれ、彫刻された花紋にも各地の風情が伺えるといふ。また磚には漢字やチベット文字が並び刻されていいるとも記されている。塔内は第一層正中に「接引仏」一尊が目をひく。石段を頂層へと登れば見事な眺望が観覧できる。

四、玉泉寺鉄塔

当陽県城の西方十五キロメートルに玉泉山がある。別名、

湖北省の古塔（岡島）

覆船山とは山の形が巨船の反転しているように見えることから、かく称されたといふ。山の東麓に玉泉（珍珠泉）があつて泉水が湧出しているところから玉泉山ともいわれる。この泉は俗に金竜池ともいふ。三国時代蜀の関羽に纏わる「漢雲長顯聖処」の側にあり、今は「珍珠橋」が架けられている。この泉に向かう手前南方に「玉泉寺」があり、その東前の丘に立つのが「玉泉寺鉄塔」である。この塔は「棟金鐵塔」あるいは「仏牙舍利宝塔」「如来舍利塔」などとも呼ばれるようである。第二層の塔身に铸して「皇宋嘉祐六年辛丑歲八月十五日」の銘記があることから北宋の嘉祐六年（一〇六一）の建立といわれる。訪問時（一九九四年三月一十六日）はちょうど全面改修中で基壇上は作業場となっていた。鉄鑄色の塔身・塔刹は可能な箇所で完全に分解されていた。この塔が銑鉄で铸造されたものであること、その精緻な铸込み技術のすばらしさには感嘆させられた。これらの各部を積み上げてゆくと、あの纖細なペンシル型の塔が出来上がるのかと想像すると感無量であった。特製の青磚を積み重ねたという三重基壇の上に七万六千六百斤（約四十六トン）の銑鉄を使用して、高さ



玉泉寺鐵塔(修築現場)

約二十メートルの八角十三層の鉄塔が建てられるわけである。この塔は倣木構樓閣式塔（木造樓閣式塔を模したも）であるが、中国に現存する鉄塔の中でも保存の良いもの一つであり、溶接部分は一切なく細部にわたる精巧な模倣は芸術的でさえある。須弥座の八隅には甲冑に身を固めた五尊の力士像（もとは八尊か）が上層を支えて立ち並んでいる。その足元は二層に見え（双重須弥座形式）、各面には八仙過海・二龍戲珠・海山・水波・海藻などの図柄が鏽込まれている。座上にはアーチ状の龕（蓮弁形龕門）

が開けられ、隅には丸柱やそれを渡る梁などが見られる。その上の各層の構造は均しく平座と腰檐がある。各々の軒下には「三ツ斗」の印象的な斗拱組み物が美しく配されている。平座上にはアーチ状の龕が相対する四面に開いている。龕の開き具合は基層から最上層まで一つ飛びに同じ（基層は南面に龕が開くか？）になつていて。その他の塔壁にはまた、いろいろな姿の仏像・菩薩像・神体・花紋などが浮き彫られている。各檐の八隅行は上層では屈曲せる竜首が突出し口に風鈴をくわえている。他に目を引く箇所をあげると、第二層の四面に塔名・建立年・工匠名等が鋲されているのと、最上層の平座上に高欄が設けられている点であろう。また、塔頂は資料写真によると、宝瓶様に見えるが確認できなかつた。檐は深く瓦や垂木も鮮やかに描写されており、八隅で上方に湾曲して壯麗である。

五、広徳寺金剛宝座塔

この塔は襄樊市襄陽県城の西約十三キロにある「広徳寺」のいちばん奥に建てられている。広徳寺はもと「雲居寺」と称され、隋・唐時期に創建されたという。唐代の詩人、



広徳寺金剛宝座塔



台座上小塔細部(金剛宝座塔)

皮日休（八三四？—八八三）に『過雲居寺玄福上人旧居詩』なるものがあり、唐朝時のこの寺の様子が詠われていると
いう。その後寺院は衰退するが明朝景泰年間に重建され、
以後現在の名に改称されたのである。今日、伽藍の周辺は
左右に農業研修施設と説明された建物が並んでいたが、そ
の他に目立つた建築物もない農業地帯である。寺院の整備

もまだまだのようであるが、この「金剛宝座多宝塔」が最
も目をひく。この寺は平地に建てられているので、一般的
な寺院の立地条件からすれば、殿宇の背後にあるべき山影
をこの塔が補っているかに見える。そもそも金剛宝座とは
釈尊成道時の座処を尊称するもので、この名を冠する記念
塔が金剛宝座仏塔、または大覺塔である。この塔の形体は
一個の高大な台座の上に五つの小塔（金剛界五部を表象する
といふ）が建てられる。中心の一基が大きく形も他と異なり、
四角の小塔は同形である。こうした形体の塔は敦煌壁画中

湖北省の古塔（岡島）

に見られ中国に早くから伝わっていたらしいが普及せず、大型のものが建立され始めたのは明朝以降であるという。明の永樂年間にインド高僧班的達(Bhandhitar)なる者が來たり、金仏五軀と金剛宝座塔の図式を献上した。皇帝はその図面をもとに塔の造営を命じ四十年後の成化九年(一四七三)完成をみたといふが、その後各地にこの形式の塔が建てられるようになり、原形を模しながらも中国的様式を取り入れつつ発展を遂げたのである。襄陽広徳寺の塔は明朝弘治七年(一四九四)の建で塔高約十七メートル、磚石造塔である。この形式の塔としては比較的単純な造りであるが、下部の高大な八角形台座は稀少である。台座の東西南北四面にアーチ状門(拱形石券門)が開き、南正門上には「多宝佛塔」と刻された石額が掲げられている。その上には「佛」三字が嵌め込まれていて、また、各面の正中には漢白玉の石龕に座仏像の彫り込まれたものが安置されている。壁面は彩色の跡がわずかに残り八隅には円柱、柱の上部に螭首、台座頂部は短檐が巡つていて、内部は中央に八角形樓閣が鎮座し四方の仏龕に座仏像が奉られている。軒下斜柱などがはつきりわかる。隅木は木材が露出している。周囲を巡

る狭い回廊の北東部分に登上門がある。階段の途中で踊り場を一つ抜けると台座上に出る。出口は小さい亭閣の形で南に門が開けられている。台座の上には中心に覆鉢式塔があり、四隅小塔は六角密檐式実心塔である。覆鉢式塔は須弥座上に覆鉢形塔身があり、相輪部分では下から八角の台、宝輪(十三天)、宝傘(?)（八隅に風鈴を下げる）、宝珠と積み上げられている。また南側塔身と相輪部の間に小仏龕が飾られている。一方、四隅小塔は八角須弥座上にのる基層に仏龕が開けられ印相の異なる座仏像が見られる。龕の開き具合は南両塔は内側向き、北の二塔は南向きである。基層八隅には下から礎盤・円柱と雀替が彫り出されている。軒下は磚が三段に積み出されている。二層目の塔身には八面全てに小仏龕を嵌め込んである。軒先はすべて外向きに弧形をなす。塔刹には黄褐色の彩色を残す宝珠がある。

六、大洪山洪山寺塔林

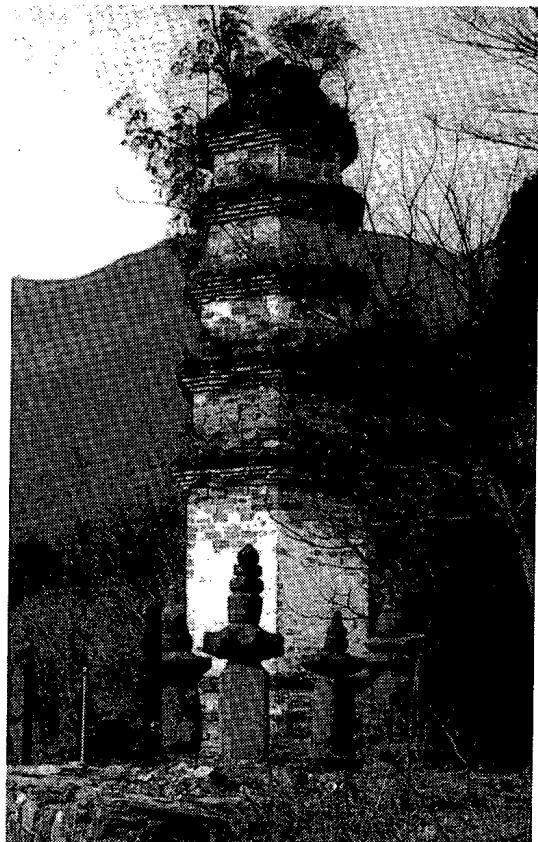
大洪山は湖北省の中北部に位置している。北に襄陽地区があり、東に渾水、西から南にかけては漢水が流れる。山岳地帯で景色は起伏に富む。それ故、「大洪山風景名勝区」

に指定されている。洪山寺遺址のある洪山寺景区はその中央部に位置している。四方を山に囲まれた小さな山里に少數の農家が散在している。この地は昔湖が有つたらしく「落湖村」の名も付いていたらしい。洪山寺は前に湖、後ろに山を背負つて建つていたという。洪山寺遺址西方の大銀杏樹（洪山寺開山慈忍禪師所栽と伝える）から道路を南下すると東辺に墓塔群がある。かつての「東塔林」である。ここは明清代の洪山寺下院住持の墓塔叢林である。十基程の墓塔の中に六角五層の磚塔がある。「通賢禪師塔」とい

い明の成化年間創建の古塔であるという。碑銘が側にあるが読めない。基座の磚中には精緻な蓮弁装飾などが残されている。基層正面（西向き）に間口三十センチほどの龕門があり内に小室があるが何もない。檐下持送りは四段に煉瓦を積み上げてある。二層の西壁に額が刻まれている。最も特徴的なのは最上層の外壁に一面三個ずつ格狭間様（蓮弁様？）の浮き彫りが嵌められていることである。その図柄は仏・菩薩か、遠目では判然としない。塔刹は倒壊していて見当ならない。いずれにせよ、さらなる保護と修復が早急に必要といえよう。

七、興福寺塔

この塔は武昌宝通禪寺の西側にある。もとは洪山の東端にあつたものを、この場に移築復元したものと聞く。伝説によれば、夏至の正午にこの塔の影が無くなることから、「無影塔」の名があるという。また、近接する靈濟塔に比べて小型なので「小塔」とも言うようである。現在は「施洋烈士墓」のある公園の片隅にひつそりと佇んでいるが、武漢地区最古老の建築物の一つである。「興福寺」とは、



洪山寺東塔林



興福寺塔

もと「晋安寺」といい、梁元帝の承聖年間（五五二—五五五）始建、隋文帝の仁寿年間（六〇一—六〇四）に改名され、清末、太平天国の乱中の武昌城争奪戦の折、寺院は破壊され唯一この塔だけが残存したという。一九五三年（六三年？）、「中南民族学院」建築の時に寺院の遺址と石塔が建設地区にあつたため文物保護部門は塔を現在地に移したという。当時石塔は既に破裂傾斜していたという。この塔の建造は南宋咸淳六年（一二七〇）という。塔上に宋代の題記が残されているというが、確認できなかつた。

塔の結構をみると、全部が石材を組み上げて造られている。「内部実体」というから塔中に空間はないようである。外観は倣木構樓閣式の八角四層で重厚な構えである。塔高は十一・二五メートルある。塔の最下部には直径四・二五メートルの八角須弥座が置かれ、仰覆蓮弁に挟まれた束には種々の花紋様が浮き彫りにされている。その上には基層が乗り全ての壁面に縦長の龕門（假門）が掘られている。龕内には須弥座上に座仏像が刻されるが、いまは多くの龕が空になつてている。その上には「出三ツ斗」斗栱が合計二十四組、等間隔に配されて檐を支えている。さらに二層目以上では腰高の平座と腰檐（モコシ？）、その上に八つの龕門、そして軒下組み物は計十六個の出三ツ斗、一番上に檐が巡つていて。二層以上に設けられた龕には仏・菩薩や羅漢、天王、力士、供養人などが刻された石板が嵌め込まれている。三、四層では平座部分にもこうした造像の付設が見られる。塔頂部は八坡式の屋根の上に八角の覆鉢様の塔刹がのせられ、八方に四角い彫り込みが見られるが細部は判らない。

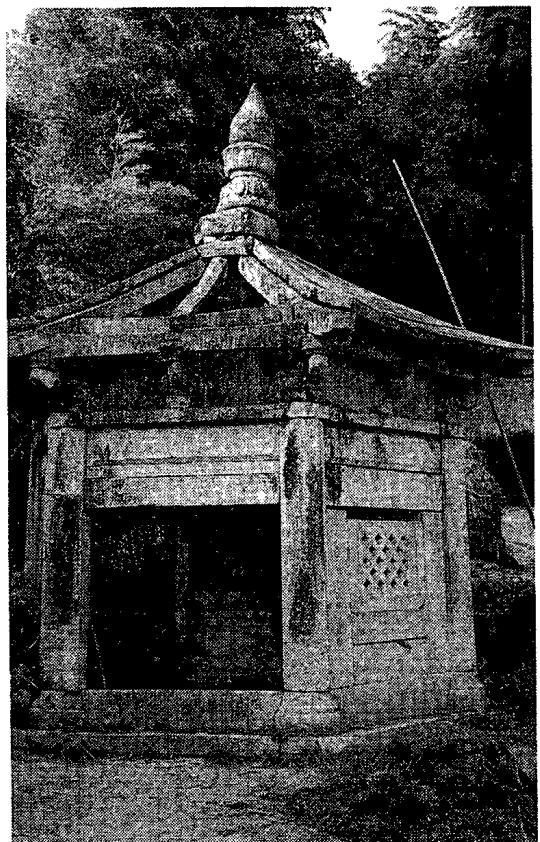
八、四祖寺毘盧塔・衆生塔

黄梅県西北十五キロの西山（破額山、双峰山）にある「四祖寺」は唐代の禪宗四祖道信（五八〇—六五一）の寺である。全体に整備はあまり進んでいない。あたりは群峰が林立し靈妙なる山気が漲っている。周辺には「靈潤橋」を始めとして歴史的文物が散見せられる。「毘盧塔」は「慈雲塔」「真身塔」、俗には「平塔」ともいい、四祖寺西峰南端の「平台」に立っている。この尾根を北にたどれば「伝法洞」にいたる。この塔は唐高宗の永徽二年（六五二）に建立された大医禪師道信の墓塔といふ。重檐亭閣式の形姿（中国仏塔類別上は単層塔中の四門塔に属するという）をもつ磚石塔である。高さ約十一・三四メートル。間口十メートル、奥行九・五メートル、ほぼ方形の平面である。台座上に蓮弁・忍冬花紋様等の刻された双層須弥座がのり、さらに塔身が建つ。南正面と東西面に高大な火焰券門が開く。また、門を取り囲むように大きな「格狭間」輪郭（花頭曲線または「壺門」）の図柄が彫り出されている。この図柄は門のない北面にも見られる。南門の図柄内には梵字

（？）が配され、花頭曲線とともに朱彩色が残っている。東西北面は磚が剥き出しどなつておらず、崩壊が激しいので特に隅の様態（護塔の神獣像などがあるとも記される）などはよくわからないが、比較的状態の良い塔身南面には、ほぼ全面に灰白色の上塗りが残され、小振りだが手の込んだ美しい斗拱組み物（資料によれば「五鋪作密排構成鴛鴦交手棋形式」という）が軒下を飾っている。台輪（斗拱下横材）下は一段にわたって蓮弁、牡丹を主要モチーフにした花紋の彫られた装飾磚が並んでいる。またその下には一



四祖寺毘盧塔



四祖寺衆生塔

はなく八角形である。北壁部分が祖師金身の安置処と思われる。塔室内は大きさの違う磚を精緻に積み上げ隅に円柱を刻む。四メートルの円柱は礎石部には仰蓮座、柱頂部には仰覆蓮弁に挟まれた金瓜（クリカボチヤ）の造形が見られる。また、上部梁の辺りには装飾煉瓦、その上には二手先斗栱が巡らされている。この塔は大変特色のある設計である。

「衆生塔」は四祖禪寺の西北の破額山中腹、民家の庭先にある。古代の建築師「魯班」の作といわれ「魯班亭」と

対の扁額がはめ込まれており、東額は「迦毘羅城□生塔」、西額は「摩迦羅國證道塔」と刻されている。四面とも同じ形式の額が上がっているが文字は異なる。重檐はとともに青灰色の仰瓦（平瓦）と蓋瓦（平瓦）で葺かれており（仰合瓦頂）の手法）、隅降棟が四方に走る。二層目南壁の中央には龕が開けられている。塔頂は寄せ棟式に瓦を葺き、塔刹は下部に鉄鑄覆蓮空体刹座（露盤）、上部に鉄鑄金瓜空体刹身（金瓜形）を置くというが、軒に繁茂した植物のためよく見えない。内室は現在空っぽであるが、四角形で



衆生塔内墓塔

も呼ばれるが、唐代のものと言われる。倣木結構の六角石亭である。一边の幅が二メートルあり、高さは八メートルある。南正面を除き、五面に球門（窓格子の紋様の一種）を施した窓があつたとされるが今は三面に窓が残る。角には方柱が立てられ、桁の上に等間隔で十二の斗栱がのつている。この斗栱は内側にも伸びて屋根の結構を支えている。屋根も石板葺きで中心に宝蓋・仰覆蓮花・宝珠がのる。亭内中央に卵形石塔が台上に安置されている。規模は小さいが重厚質朴な形態がすばらしい。

九、五祖寺五祖大満宝塔・十方仏塔

「五祖寺」は黄梅県城東方十二キロの東山（馮茂山）にあるので「東山寺」ともいう。唐の咸亨年間（六七〇—六七四）に禪宗五祖の弘忍（六〇一—六七四）が創建した寺院で、明の万曆年間（一五七三—一六二〇）に改修、また清の咸豐四年（一八五四）に焼失、後に再建されている。整備は着々と進められている。広大な寺域に「飛虹橋」「授法洞」「桃源洞」「放光石」「棋盤石」「講經台」など多くの名勝旧跡がある。塔としては「釈迦多宝仏塔」「大満

亭である。一边の幅が二メートルあり、高さは八メートルある。南正面を除き、五面に球門（窓格子の紋様の一種）を施した窓があつたとされるが今は三面に窓が残る。角には方柱が立てられ、桁の上に等間隔で十二の斗栱がのつている。この斗栱は内側にも伸びて屋根の結構を支えている。屋根も石板葺きで中心に宝蓋・仰覆蓮花・宝珠がのる。亭内中央に卵形石塔が台上に安置されている。規模は小さいが重厚質朴な形態がすばらしい。

も呼ばれるが、唐代のものと言われる。倣木結構の六角石亭である。一边の幅が二メートルあり、高さは八メートルある。南正面を除き、五面に球門（窓格子の紋様の一種）を施した窓があつたとされるが今は三面に窓が残る。角には方柱が立てられ、桁の上に等間隔で十二の斗栱がのつている。この斗栱は内側にも伸びて屋根の結構を支えている。屋根も石板葺きで中心に宝蓋・仰覆蓮花・宝珠がのる。亭内中央に卵形石塔が台上に安置されている。規模は小さいが重厚質朴な形態がすばらしい。

禅師石塔」「十方仏塔」「法雨塔」などが名高い。また、寺域内には「西塔林」「東塔林」などもある。

今回の踏査（一九九五年九月十一日）では滞在時間の都合もあり、また炎暑の時節のこともあり、釈迦多宝仏塔、三千仏塔、塔林などは見ることができなかつた。また、五祖真身を安置するという法雨塔は屋内に厳重に奉られているので充分に調査できなかつた。それ故ここでは大満宝塔と十方仏塔のみ報告する。

「五祖大満宝塔」は聖母殿わきから続く通天路を登ると



五祖寺大満宝塔

湖北省の古塔（岡島）

建つてゐる。背後に「大満塔院」の殿宇をひかえ、さらに巨大な盤石上に講経台がのぞまれる。この塔は民国二十二年（一九三三）の建立というから新しいものであるが、青灰色の砂岩で出来てゐるから風化が速いのか古びた感じである。形式は飛虹橋東出口にある「求兒塔」に酷似している。南正面には香台が置かれ線香が沢山立てられてゐる。塔の下部は平面四方形の須弥座である。東西幅二・三三メートル、奥行二・二六メートルあり、高さは一・四六メートルである。合計七段の四角石段が積み上げられているが、中央の東部分が最も幅が狭く、その上下三段は凹凸線脚（縫目模様？）を彫刻されているが、中央から離れるにつれて徐々に幅を広くとる。その上には塔身・塔刹がのるが、その高さは二・七六メートルといわれる。覆鉢式（ラマ式）の形態を示すが、その形を評して薬葫蘆（薬入れの瓢箪？）に似るともいわれる。最下層は平面円形の一塊石で三段に彫り出され上段に蓮弁が刻されている。その上の覆鉢形の部分は上に行くほど径が大きくなっている。正面にアーチ形の龕洞が開けられ、龕の上方に「五祖」の二字、龕の右に「大満」左に「宝塔」の文字がそれぞれ彫刻され

てゐる。この箇所は上下二塊の石材を用いて造られている。さらに塔頂には五つの宝輪が刻され最上部に宝珠が見えるが、受け花（蓮弁）等はなく素朴な造りをしている。唐の代宗が「法雨」と命名した五祖弘忍大師の塔はもとは五祖真身の蔵された場所にあつたが、民国十六年（一九二七）四月に五祖真身が破損した折、現在の塔を建てその舍利（骨灰）を埋葬したとされる。

「十方仏塔」は飛虹橋下の西塔林付近の路傍にある。写真で見た釈迦多宝如来石塔によく似ている。さらに三千仏



五祖寺十方仏塔

塔も加えて建塔時期が同じであるのも面白い。塔の建造は北宋宣和三年（一一二二）といわれる。青灰色砂岩から彫り出された八角七層の石塔で塔高は六・三六メートルある。

外觀は大変細長くスリムな印象を与えている。剥き出しの自然石の上に八角須弥座が乗り、その上に塔身が積み上げられている。第一層塔身には南正面に仏龕が開き、その上方に「十方」の二字が線刻されている。また龕の下に「佛」の文字が刻まれている。塔名の由来であろうか。更に、他の七面には「七如來」の名字が見られる。即ち、正面左から時計回りに「南無多宝如來」「南無寶勝如來」「南無妙色身如來」「南無廣博身如來」「南無離怖畏如來」「南無甘露王如來」「南無阿彌陀如來」である。一、二、三、四層の正面にも龕があり、内部に仏像を刻す。五層以上には龕はない。檐は八隅を支えとして深く幕が垂れ下がるように深く湾曲している。塔頂には蓮弁らしき彫刻のみえる覆鉢形の台と、その上にもう一段丸座布団様の石台があるだけである。本来は塔刹の宝珠があつたと思われる。辺りは松林で涼しげな風情を見せている。

湖北省の古塔（岡島）

後記

今回取り上げた古塔は平成六年三月二十二日から三十一日にかけて踏査したものがほとんどであるが、黃梅県の文物だけは平成七年九月五日から十五日にかけての旅行で訪れたものである。旅の途中で見舞われたさまざまな難儀や目新しい景観などを写真と資料を突き合わせながら思い起こしつつ記したのであつた。

ここで詳述しなかつた塔のうち印象的だったのは有名な



勝象宝塔

湖北省の古塔（岡島）

「黄鶴樓」の西側にあつた「勝象宝塔」である。この塔はもと蛇山西端にあつたのを武漢長江大橋の架設を機に現在地に移築復元したものであるという。「孔明灯」の称号をもつ優美な覆鉢式磚石塔は元代に始建されている。その白く端正な造りには定評があり、多くの資料に紹介されてくるのだが、塔高九・三六メートルの塔は華麗雄大な黄鶴楼の前庭であまり注目されていないようと思われた。

また、「玉泉寺鉄塔」は生憎の改築中で、期待して訪れたこともあり残念であった。修復現場に入れてもらつて拝見した構築部品と資料に基づいて本文を記すことになったのである。

参考文献

- 一、『中国古塔』〔祖国叢書〕羅哲文著（中国青年出版社、一九八五年）
- 二、『中国古塔』（華藝出版社、一九九〇年）
- 三、『中国名勝旧跡事典』第三卷（ペリカン社、一九八八年）
- 四、『五祖寺志』（湖北科学技術出版社、一九九二年）
- 五、『楚天名勝大洪山』（中国新聞出版社、一九八九年）
- 六、『荊州漫歩』張雪年（湖北人民出版社、一九八六年）

- 七、『玉泉寺』〔当陽旅遊叢書〕当陽県文化館編（一九八五年）
- 八、『古建築の細部意匠』近藤豊著（大河出版、一九七一年）
- 九、『中国古建築修繕技術』文化部文物保護科研所主編（中国建築工業出版社、一九八三年）
- 十、『古塔』〔文物鑑賞叢書〕李承凱他 編著（上海古籍出版社、一九九三年）